

村上地区 福祉活動計画 ヒアリング

日 時 平成 30 年 7 月 6 日（金） 11：30～12：40

対象者 団体名：村上 ohana ネット（代表者：渡辺ひろみ）

訪問者 佐藤富喜子、相馬智里

内 容

（参加者へのヒアリング）

【村上市で暮らしづらさを感じることはありますか？】

- ・子どもと遊べる公園がない。唯一鮭公園があるが、池もあり危険。雨の日の後にはすべり台の下に雨水が溜まり、とても遊べるような状態ではない。瀬波の恐竜公園は子どもが怖がる。
- ・公園の遊具が劣化して撤去されているところもあり、遊具不足。また、劣化した遊具がそのままになっているところもあり、どこに連絡をしたらいいかわからない。
- ・小児科、産婦人科が少ない。産婦人科については新発田まで足をのばしている人も多い。村上総合病院産婦人科の環境の悪さ。
- ・2人目が欲しくてもサポートがないため不安に感じている。他市では子育て支援が充実しているが村上市では圧倒的に足りないと思う。新発田市では、自分の家で子どもを見てくれる体制が整っており、以前新発田市のファミサポを利用した際、19 時半過ぎに帰宅した時には預けた子どものご飯もお風呂も済ませておいてくれてたいへん助かったことがある。村上市のファミサポは利用時間の相談にも乗ってもらえず、対応のバリエーションの乏しさを感じる。もっとニーズに合ったサービスを提供してほしい。
- ・保育園に入れられない。やっとは入れても家から遠いところなので送迎が大変。仕事復帰したくても保育園に預けられないので育休期間を延ばした。

⇒村上市で子どもを産み、子育てしていく上でのバックアップ不足。環境が整っていない。

【災害や緊急事態の時、隣近所に助けを求められますか？】

また、病院や買い物へ行く時気軽に頼める人はいますか？】

- ・います。村上市は案外頼みやすいかも？
- ・隣の他人に頼むのはハードルが高い。
- ・転勤族だったりすると、近隣住民との関係が築けないから気軽には頼みづらい。

⇒家族形態が変容し、気軽に頼める親せきもいなくなっている。

**【安心して子育てしていくために何が必要ですか？】**

- ・新潟市東区にある平山公園のような施設。外の遊具は充実しており、中の施設で遊ぶこともできる。村上市上海布地区の廃校利用について、子どものための施設を、と提案もしたが、結局地域住民の憩いの場のような施設になった。
- ・他市からも人を呼べるような遊具施設。せっかく遠くから子連れの友達が遊びに来て、市内で遊びに行ける場所がない。
- ・顔の見える、動きの見えるサポート事業。例えば村上市のファミサポ等は、どんな人が登録しているのか分からないことやどんな人が頼んでいるのか実態も知れないことから、気軽に頼みづらい。
- ・依頼に対して柔軟に対応してくれるような支援事業。
- ・このような、市への要望をあげることのできる機会や場を、月1回くらいの頻度で作ってほしい。

(代表者へのヒアリング)

**【参加者の声に対して】**

- ・このように、みなさんいろんな思いを抱きながらこの地で暮らしている。子育て支援やママさん達の集まる場が不足している村上市で、「もう一人産もう」という気持ちには到底なれないママさんが多い。しかし、暮らしづらさを抱えながらも自分たちで何とかしていこうという熱意を持っている人も多く、新たに集いの場を立ち上げたり、ママさん同士で助け合ったりなど、自分たちの手でよりよくしていこうという動きがある。
- ・今回、自分の抱えている暮らしづらさや、市への要望などをママさん同士が共有できる機会を作ってもらいありがたかった。

**【市からのバックアップはありますか？】**

- ・当事業は参加費（内容によって参加費は異なるが基本的に300円）をいただいているので、市からのバックアップは受けることができない。この参加費では運営費に充てることもままならず、内容によっては赤字になることもある。それでも、まち協から毎月5,000円もらえるようになり、人件費や講師への謝金に充てるにはまだまだ不足だが、以前よりはよくなってきている。
- ・事業の中で、今回のように市への要望があがることも多く、それを行政へ届けているが、返答をもらえるどころか実態を見に来てくれたことも1度もない。議員さんも子育て支援に関して一生懸命市へ要望をあげてくれてはいるが、市からの反応はいま一つ。

**【近隣住民同士や参加者同士での助け合いの実態について】**

- ・参加者の中での、コミュニケーションが上手にとれる人は地域の中でも上手に関係を築き

ながら助け合いをしている人もいる。ママ友同士での助け合いは、正直無理があるのではないかと思う。自分の子どもを抱えながらよその子を見ることについて責任も重く、プレッシャーもあるので。

- ・ママさん世代の人たちは基本的に、世代を超えて繋がることに苦手があるように思う。

### 【異世代交流の苦手さについて】

- ・価値観の違いを恐れず、一緒に活動させてみる。経験を積むことにより、お互いに折り合いをつけながら学んでいくから。例えば、荒川地区のラベンダー広場の、ロウるさいお姑世代とイマドキの若いママさん達は、最初はお互い文句を言いながら活動をしていただけたけれど、参加の足が遠のくことなく、今も関係を築きながら活動を続けている。
- ・子育ても介護もすべては繋がっている。多世代が行き交う社会の中で、共に生きていかななくてはならないのだから、価値観を擦り合わせながらもお互いに助け合い、共存していくことのできる社会を作っていければと思う。

### 【今後必要なサービスについて】

- ・助け合いの仕組みづくりについては、この村上市だからこそ実現可能なのではないかと思います。ぜひ年齢制限の縛りなく“子守り”し合えるようなサービスを作っていただきたい。以前山北地区でそのような要望が数人のママさんからあがったことがあった。小学校の授業参観の時、下の子を見てくれる人が周りにいなく、やむを得ず連れて行ったら断られたことも。
- ・行政が立ち上げた事業だと、どうしても行政主導になりやすく、縛りがしやすい。住民からどんどん要望をあげていくことが大切と思う。民間の柔軟性を活かした事業の設立が理想。
- ・「おもしろそうだ」と興味をもたせ、住民を引き込む事業を。課題や困難なことをきっかけにするとどうしてもマイナス思考の入口となってしまう。できるだけプラス思考のきっかけや入口づくりをした方が住民を巻き込みやすいのではないだろうか。「こんな地域なら、ここで暮らしていてもいいかな——。」と思えるようなことがあるとよい。廃校が増えてきているので、その活用事業もおもしろそう。住民主体で、住民自身が楽しみながら活動できるような何かを。
- ・今回のように職員が現場に出向いて来てほしい。そして参加者の話を聴き、気付き、実際に行動に繋げていっていただきたい。地域ごとのワーウショップも有効では。